

保育・教育実習において学生が自己評価する 表現実技における羞恥心の実態

The actual situation of students feeling embarrassed in
regards to self-evaluating their “expression skills”
in nursing and early childhood education training.

橘 和代^{*1} 杉浦宏季^{*2} 真田悦子^{*3}

(Kazuyo Tachibana Hiroki Sugiura Etsuko Sanada)

要旨：

本研究の目的は、保育・教育実習において学生が自己評価する「表現実技」における「恥かしさ」の実態を探ることであった。実習で行う保育内容の頻度が高い「ピアノ伴奏」「弾き歌い」「歌（アカペラ）」「絵本読み聞かせ」「手遊び」の5つを取り上げ「恥かしい」と感じる実技を1から5段階で回答してもらった。結果、「歌（アカペラ）」が一番恥かしく「絵本読み聞かせ」が一番恥かしくなかった結果であった。また、恥かしさの要因として注目と評価を選択する学生が過半数であった。また、場面と恥かしさの度合いの関係については明らかにすることが出来なかった。

キーワード：Expression（表現） Practical training（実習） Feeling embarrassed（恥かしさ） Attention（注目） Evaluation（評価）

I. 緒言

これまで、「羞恥」感情における研究は心理学においても研究対象として取り上げられることが少なく、Lewinsky¹⁾が臨床に関連した研究でいくつかの問題を提示し、今日の研究の高い関心のきっかけとなっている。また、恥かしさが心理学の中で特に大きく注目を集めるようになったのはZimbardo²⁾の数か国にわたった5000人にも及ぶ調査であると成田³⁾は述べている。Zimbardo²⁾は、恥かしさに関連した思考、感情、行動、身体的特徴、あるいは恥かしさの生起する状況、その時の状態、その原因などを調査し整理している。アメリカ合衆国において過去の時点あるいは現在でいくらかでも自らを恥しがりやであると評価した人は全体の80%を示した結果を得ている。成田³⁾は、この結果に対して恥かしさの現象が、非常に一般的であることの一例として捉えられたと述べている。また、この研究の目的が恥かしさに思い悩む人に対する臨床的応用を考え行ってきた研究であるため、社会的不適応をもたらすと考えられるいくつかの行動について治療を施すことが最終目的でもあった。その後我が国においても恥かしさを取り上げた研究が増え始めている。

恥かしいと感じる感情は、子どもから大人まで誰もが抱く当たり前の感情である。特に乳

*1有明教育芸術短期大学 *2福井工業大学 *3大原スポーツ医療保育福祉専門学校

児期における人見知り（見慣れない人に対する恐怖心）などは発育発達のひとつの段階でもある。しかし、思春期から大人になるにつれて、その感情が負のスパイラルを引き起こすことで日々の生活、学校や仕事、対人関係などに影響をおよぼすことは避けるべきである。が、しかし、その感情を当事者が自覚および客観視できれば、また具体的な手法で一瞬でも恥かしさを取り除いたりすることができれば恥かしさは人間の自然な感情としてコントロールできると筆者は考える。Lewinsky¹⁾ が恥かしさは他人との関係においてのみ表現されるものと述べている。確かに人間が人以外の「もの」に恥かしさを抱くことはまずありえない。

筆者が所属する短期大学は、保育者および教育者を輩出する養成校として様々な表現活動を取り入れている。中でも絵本の読み聞かせ、ピアノ伴奏、ピアノ弾き歌い、手遊び、歌などの「表現実技」は、保育・幼児教育者を目指す学生にとって必修の学習である。また、これらすべての活動は人前での行為であるため、技術の習得および達成度に加えて羞恥心（恥かしさ）の有無も教育者を目指すうえで乗り越えなければならない課題である。しかし、教育者を目指している学生の性格や学習していく過程において、強い羞恥心が引き金となって将来の選択肢を狭めてしまうことも考えられる。自身の感情を無理に抑制してパフォーマンスを行ったとしても、対象者への影響も懸念されるであろう。よって、保育・幼児教育者をを目指す学生の「表現実技」における羞恥心を除去あるいは軽減させる必要があると考えるが、羞恥心の要因やそれを克服するための具体的な研究は未だ少ない。

Ⅱ.これまでの研究および取り組み

これまで筆者は、杉浦⁴⁾らとともに身体表現活動における羞恥心の要因の検討を行うため、身体表現時において羞恥心を感じる要因の検討に有効な質問紙項目の選択を行ってきた。F県在住の青年学生223名を対象に行った質問紙法の結果、身体表現活動における「恥かしさ」の理由として過半数の者が選択した項目は「経験の少なさ」のみ(57.5%)であった。また、「経験の少なさ」という項目に続いて比率の高かった項目は「自身への注目」(44.3%)、「性格の問題」、「自信のなさ」であった。つまり羞恥心の有無や程度には、過去の経験や自信、周囲からの評価などが大きく影響している可能性が表出した。さらに自由記述における結果においても、周囲からの評価（周りに評価されるのが怖い、周りにどう思われているか不安、周りに笑われるのが怖い、人からよく思われたいという感情、期待を裏切りたくない）や自信（練習不足、慣れていない、失敗が怖い、自身がない）に関する項目に次いで、「人の視線が気になる」や「人の視線に慣れていない」という回答も多かった。人見知りか否かの項目に関しては、自覚的な回答であることからその程度には個人差があるものの「かなり人見知り」「まあ人見知り」と自己評価する割合は78.3%であった。人見知りにおいては、日本人特有の「控え目さ」が表現を変えて表出した可能性も考えられる。また、地域性、年齢、経験値によってその特徴も異なるであろう。

以上のことからこの調査において、身体表現活動時の羞恥心には、「評価」、「自信」、「注目」、および「性格」のカテゴリーに関する項目が関与していることが示唆された結果となった。

Ⅲ. 研究の目的

本研究では、まず杉浦⁴⁾らの研究結果の再確認を行い、これらの結果をもとに保育・教育実習における学生の表現実技における「恥かしさ」の実態を明らかにすることであった。特

に「注目」や「評価」および「経験値」に着目した。その理由として、筆者が行っている保育・教育実習事後指導のアンケートにおいて「絵本の読み聞かせ」や「紙芝居」などは割合自信をもって行えるが、「ピアノ伴奏」や「弾き歌い」「アカペラでうたう」に関しては自分の練習不足もあるがどうしても羞恥心を拭いきれないという学生の本音が散見していたためである。特に「アカペラで歌う」といった道具を一切使わずに生の声で歌うことに戸惑いを感じる学生が多いように感じた。また、1年次における歌と手遊びの授業において、グループ活動よりも個人で何かを人前で行うことに対して抵抗感を強く抱く学生の発言も気になった。音楽的要素が多い「表現実技」とそうではない「表現実技」に対する「恥かしさ」についての差異、「注目」される人や場面によって、また「評価」の有無との関係性も視野に入れた。よって本研究の目的は、対象者が異なっても羞恥心の要因において同様の結果であるかどうか、その結果も踏まえて保育・教育実習において学生が自己評価する「表現実技」における「恥かしさ」の実態を探ることであった。実習先の指導内容によってはその経験値にばらつきがあるが、筆者の保育者経験から部分実習や設定保育以外の時間帯（給食、おやつの時間、お帰りの待ち時間などの隙間時間）でも頻繁に経験しているであろうと考える「ピアノ伴奏」「弾き歌い」「歌（アカペラ）」「絵本読み聞かせ」「手遊び」の5つの保育内容を選定し、「声を出すこと」への羞恥心に着目した。よって、今回は「造形・製作」、「ダンスや踊り」は質問内容から省き、本研究においては、これら5つの取り組みを「身体表現活動」ではなく「表現実技」という言葉を使用した。

Ⅳ. 研究の方法

1. 対象者および調査時期

対象者：A短期大学において保育および教育実習の経験がある学生150名（28年度3年生と29年度3年生）を対象とした。150名中男性は24名女性126名であった（回収率100%）。実習時における恥かしさの調査では、回収内容を吟味（記入漏れ、順位解答になっていない）し、21名のデータは除外して129名（21.0±2歳）のデータを有効と判断し活用した。

調査時期：平成28年11月および平成29年11月（保育内容総論の授業後）

2. 調査方法

上記150名を対象に、前回F県で実施した質問紙法に新たに実習時や授業における「表現実技」に対する「恥かしさ」についての質問内容を加えて実施した。事前に本研究における「表現実技」の言葉の定義を説明してから行った。

まず杉浦⁴⁾らとの研究において得られた知見をもとに、羞恥心の要因の検討に有効と示唆された質問項目を使用し、上記対象者に「人前で何かを行う際（歌う、踊る、話すなど）に「恥かしい」と感じる背景にはどのような理由があると考えますか」の質問に対し、該当すると思うもの全てを選択してもらった。また「恥かしい」と感じる背景について自由記載の欄を設けて意見を求めた。

また、「ピアノ伴奏」「弾き歌い」「歌（アカペラ）」「絵本読み聞かせ」「手遊び」の5つの表現実技を行う際に「恥かしい」と感じる実技を1から5段階（1が一番恥ずかしい）で回答してもらった。前回の研究で恥かしさの要因に挙げられた「視線」と「評価」との関係の有無も調査するため、「子どものみの前」「子どもと実習の先生の前」「学校の授業」の3場面

において同じ質問を行った。

3. 分析方法

F県実施同様の質問紙調査、人前で何かを行う際（歌う、踊る、話すなど）に恥ずかしいと感じる背景の理由においては単純集計を行った。質問紙で使用した「経験値」「状況」「性格・自覚」のカテゴリーを杉浦ら⁵⁾、桶田ら⁶⁾ および後藤ら⁷⁾ の報告を参考に杉浦*²、真田*³らとで協議し、「経験値」には「嫌な経験や記憶」と「課題・練習」、「状況」には「注目度」と「評価」に分類した。また、自由記述の分析⁸⁾ においては、1つの内容を1記述としカード化、グループ化し、読み取り（解釈）と総合化⁸⁾ の作業を行った。その意味内容から①自信②注目③評価④性格⑤経験の5つのカテゴリーに分類し、サブカテゴリーを抽出した。読み取り（解釈）および分類に際しては前述同様に杉浦*²、真田*³らとで協議し信頼性・妥当性を確保した。

保育・教育実習において学生が自己評価する「表現実技」における「恥ずかしさ」においては単純集計を行い、出村ら⁹⁾ の調査データの活用法を頼りに考察へと導いた。

5. 倫理的配慮

学生に文書および口頭でアンケートへの協力は自由意志であること、研究の趣旨、実習や履修科目などの評価に影響しないこと、および個人名が特定されることはないことを説明した。また得られた結果は大学紀要などで発表することも伝えた。

V. 結果

Table 1は、「人前で何かを行う際（歌う、踊る、話すなど）に「恥ずかしいと感じる背景にはどのような理由があるか」と考えるか」の質問に対し、該当すると思う項目を選択した者の度数と比率を示している。

前回実施のF県在住の青年学生223名を対象に行った質問紙法の結果において、過半数の者が選択した項目は「経験の少なさ」のみであったのに対し、今回のA短大の150名の調査では「注目度」（63.16%）および「経験の少なさ」（53.95%）の2項目が過半数を超えた結果となった。「注目度」の比率が高かった理由として、A短大の対象者全てが実習経験者であることから「注目される」ことが「恥ずかしさ」の一要因として高く挙げられたとも考えられる。「経験値」においては過去の失敗や笑われたなどといった「嫌な経験や記憶」が3割近くで、課題としての練習不足による「経験の少なさ」（53.95%）は過半数であった。また、過半数には満たなかったが、失敗や容姿、声量、音程などの「自信」に関するカテゴリーが平均で4割近くを示した。

一方、自己の判断で、恥ずかしさを軽減または、意識的に羞恥心を除去できるかという設問の結果はTable 2に示すとおりである。7割近くの学生が羞恥心をコントロールしようと思えばできると回答している。

Table 3は、「人前で何かを行う際（歌う、踊る、話すなど）に「恥ずかしいと感じる背景の自由記述を1記述とし、その意味内容から①自信②注目③評価④性格⑤経験の5つのカテゴリーおよびサブカテゴリーに分類し、30記述をそのまま示したものである。「自信」と「注目」に関する記述が多く、質問紙による選択では表現できなかった内容が自由記述で可視化された。「自信」においては、苦手意識からくる【自信のなさ】と恥ずかしさを克服する方法

Table 1 人前で何かを行う際（歌う、踊る、話すなど）に恥ずかしいと感じる背景の理由

カテゴリー	サブカテゴリー	選択項目	度数	比率
経験値	嫌な経験や記憶	過去に失敗した経験があるから	41	26.97
		過去に笑われた（馬鹿にされた）経験があるから	43	28.29
		過去に人が失敗したり笑われたりしたのを見たから	44	28.95
		褒められた経験がないから	13	8.55
	課題	経験が少ないから（練習不足）	82	53.95
状況	注目度	自分が注目されるから	96	63.16
	評価	失敗が許されないから	31	20.39
		人が自分よりも上手だから（比較されるから）	59	38.82
性格		プライドが高いから	26	17.11
		性格上の問題（ネガティブ・根暗・陰湿）	54	35.53
自信		失敗したくないから	67	44.08
		容姿や自分に自信がないから	67	44.08
		声色や声量、音程などに自信がないから	49	32.24

Table 2 何かのきっかけがあれば自己の判断で羞恥心を忘れて自己表現できるか

	度数	比率
1. できる	35	25.5%
2. できるときもある	68	49.6%
3. どちらかというときできない	29	21.3%
4. 全くできない	5	3.6%

n=137（未記入14）

Table3 人前で何かを行う際（歌う、踊る、話すなど）に恥ずかしいと感じる背景の自由記述

カテゴリー	サブカテゴリー	主な記述内容
自信（8）	恥ずかしさを克服する方法	自分が納得するまで仕上げたものではない時、人に見せるのは恥ずかしいと思う
		恥ずかしいのは、自分を認めてもらえるか不安で自信がないから表れるもの。たとえば「歌」なら自分なりに練習して他人にほめてもらってその経験をしていくことで、自信になり“恥ずかしい”という感情から“見てほしい”という風になる
		一人だけだととても恥ずかしい。複数の人や人数が増えると恥ずかしさが小さくなっていく
	苦手意識からくる自信のなさ	良く見せられないから、自信がないから
		緊張するから 自分に自信が全くないから
		自信がない
		歌と踊りは得意でないから
注目（9）	視線	自分の声が響く感じが恥ずかしい
		見られている視線に対して目を合わせられない
		視線をあびて、その上笑われるから
		注目されるから
		不安と視線が一番の理由

注目（９）	視線	人が自分のことだけを見ているから
		自分を見られるのが嫌い
		見られている感じが嫌
	目立ちたくない	人前に出たくない 前にでるのが嫌だ
評価（３）		他者に評価される
		見せた後、何か言われると怖いから
		周りからなんて思われるかわからない
性格（６）	緊張・あがり	プレッシャー・アガリ症
		緊張感が恥かしさを生む
		人の前で行うのに緊張する
		人の前で話したりするときに、顔が赤くなるから
		自分のもっている力の最大限を見せようとするから（負けず嫌い）
		明るい性格でない
経験（４）	嫌な経験	友達の前でさらし者にされた嫌な経験
		中学の時、意見文を前に立って読むのが恥かしかった経験がある
	慣れ（課題）	人前に出ること慣れていないから
		経験がやはり少ないから 経験で自信がつく

とも読み取れる【自信のつけ方】について記述が分かれた。「②注目」においては、人前に出たくない、「視線」をあびたくないといった、人から見られることに対する自意識を表す記述が目立った。「④性格」においては緊張やあがりについての記載があった。「⑤経験」においては、Table 1同様、嫌な経験、また慣れが自信につながるといった前向きな記述もあった。認めてもらえるか否か、褒めてもらえるか、また練習することで「①自信」に繋げるといった記述からは「③評価」との関係性も読み取れる。また、一人ではなく複数の人で行うことで慣れるといった「経験値」を増やすことで自信につながり「恥かしさ」克服のヒントになりうる記載もあった。以上のことから、A短期大学の質問紙調査においてもF県における調査と同様「注目（視線）」、「経験（練習含む）」、「自信」などが「恥かしさ」に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

本研究の目的である、実習および学校の授業における「表現実技」に対する「恥かしさ」の度合いについては以下の結果となった。

Table 4は、「子どものみの前」で行う5つの表現実技【「ピアノ伴奏」「弾き歌い」「歌（アカペラ）」「絵本読み聞かせ」「手遊び」】の「恥かしさ」における順位およびその度数と比率を示している。Table 5は、「子どもと実習の先生の前」で行う5つの表現実技【「ピアノ伴奏」「弾き歌い」「歌（アカペラ）」「絵本読み聞かせ」「手遊び」】の「恥かしさ」における順位およびその度数と比率を示している。Table 6は、「学校の授業」で行う5つの表現実技【「ピアノ伴奏」「弾き歌い」「歌（アカペラ）」「絵本読み聞かせ」「手遊び」】の「恥かしさ」における順位およびその度数と比率を示している。

「子どものみの前」「子どもと実習の先生の前」「学校の授業」のすべての場面において「歌（アカペラ）」が恥かしさの1位を示し、「弾き歌い」が2位であった。1位と2位の割合において「歌（アカペラ）」が全ての場面で過半数【子ども（56.5）、子どもと先生（56.5）、学校の

授業（55.8）】を示した。続いて、いずれの場面もピアノ伴奏、手遊び、絵本という順番であった。場面による恥かしさの度合いに大きな差はなかった。

Table 4 実習先で子どものみの前で行う表現実技の恥かしさの順位の度数およびその比率

恥ずかしさの順位		1	2	3	4	5
子どものみの前	ピアノ伴奏	22	25	39	18	25
		17.1%	19.4%	30.2%	13.9%	19.4%
	弾き歌い	33	53	20	17	6
		25.6%	41.0%	15.5%	13.2%	4.7%
	歌（アカベラ）	53	20	36	10	10
		41.0%	15.5%	27.9%	7.8%	7.8%
	絵本	7	11	21	44	46
		5.4%	8.5%	16.3%	34.1%	35.7%
	手遊び	14	20	13	40	42
		10.9%	15.5%	10.1%	31.0%	32.5%

n = 129

Table 5 実習先で子どもと実習の先生の前で行う表現実技の恥かしさの順位の度数および比率

恥ずかしさの順位		1	2	3	4	5
子どもと実習の先生の前	ピアノ伴奏	21	25	34	19	30
		16.3%	19.4%	26.4%	14.7%	23.2%
	弾き歌い	28	57	19	24	1
		21.7%	44.2%	14.7%	18.6%	0.8%
	歌（アカベラ）	55	18	36	9	11
		42.6%	13.9%	27.9%	7.1%	8.5%
	絵本	11	10	23	43	42
		8.5%	7.8%	17.8%	33.3%	32.6%
	手遊び	14	19	17	34	45
		10.9%	14.7%	13.2%	26.4%	34.8%

n = 129

Table 6 学校の授業で行う表現実技の恥かしさの順位の度数およびその比率

恥ずかしさの順位		1	2	3	4	5
学校の授業	ピアノ伴奏	12	24	38	21	34
		9.3%	18.6%	29.4%	16.3%	26.4%
	弾き歌い	40	56	11	20	2
		31.0%	43.4%	8.5%	15.5%	1.6%
	歌（アカベラ）	56	16	37	10	10
		43.4%	12.4%	28.6%	7.8%	7.8%
	絵本	9	15	20	45	40
		7.0%	11.7%	15.5%	34.8%	31.0%
	手遊び	12	18	22	34	43
		9.3%	13.9%	17.1%	26.4%	33.3%

n = 129

Ⅵ. 考察

本研究の目的はA短大150名の質問紙調査をもとに、保育・教育実習において学生が自己評価する「表現実技」における「恥かしさ」の実態を探ることであった。また、杉浦ら(4)の報告を参考に、人前で何かを行う際（歌う、踊る、話すなど）に恥かしいと感じる背景についても同時に調査し、考察の参考とした。「注目される」ことが羞恥心の一要因として高く挙げられた結果を受けて、A短大の対象者全てが実習経験者であることから、子どもの前や実習指導者および大学評価者の前で「注目されること」となんらかの因果関係があるのではないかと仮説を立てた。

結果、実習における注目（視線）の場面および対象者である「子どものみの前」「子どもと実習の先生の前」「学校の授業」において、子どものみであっても子どもと先生の前であっても恥かしさの度合いに大きな差は見られなかった。しかし、「学校の授業」という場面において、77%以上（1位と2位の度合い）の学生が「弾き歌い」を恥かしいと選んだ結果となった。「弾き歌い」が、伴奏と歌を同時に行う表現実技であるため、授業という場面では、「評価」や「自信」「経験（練習）」に加えて、仮説だが「難易度」という新しいカテゴリーが浮上した。また、「恥かしさ」の度合いで「歌（アカペラ）」と「弾き歌い」が上位を占めたことは、実習事前事後指導において「絵本の読み聞かせ」や「紙芝居」などは割合自信をもって行えるが、「ピアノ伴奏」や「弾き歌い」「アカペラでうたう」に関しては、自分の練習不足もあるがどうしても羞恥心を拭いきれないという学生の事前事後指導アンケート調査結果の本音を裏付ける結果となった。歌と弾き歌いは必ず自分の生の声の表現が伴うため、ピアノ伴奏のみや絵本といった道具を使用する場合とで注目（視線）に対する意識の違いが生まれるのかもしれない。ではなぜ、歌を伴う手遊びは羞恥心の度合いが低かったのだろうか。筆者自身の経験からの推測だが、手遊びなどは、保育者を目指した時点でボランティアなどに出向いて経験値があったり、少ない練習で習得できたりすることに加え、子どもの興味やペースに合わせてすすめられる取り組みであることなどが考えられる。また歌やピアノのように楽譜に従う技術ではないことも学生の技術習得の手助けにもなっているであろう。

性格心理学研究を専門とする有光¹⁰⁾の羞恥心と罪悪感との関係においては、高い相関が認められており、相互に深い関係が示されている。本研究におけるカテゴリー「経験値」の中の「練習不足」は、ある種の自覚的な罪悪感ともいえよう。また、Lewis¹¹⁾が幼児を対象に行った研究では、被験者が「困難な取り組み」に失敗した場合よりも「簡単な取り組み」に失敗した場合に有意に多くの「恥かしさ」が示され、被験者が困難な取り組みに成功した場合に有意に多くの「誇り」が示されている。これは、幼児を対象とした結果ではあるが貴重な知見であると考ええる。本研究の自由記述において、ある学生が、「恥かしさを克服する方法として練習して他人にほめてもらってその経験をしていくことで自信になり、”恥しい”という感情から”見てほしい”に変わる」と前向き思考の記述をしているが、学生（大人）においても簡単な取り組みの繰り返しで自信をつけることで「恥かしさ」が「誇り」に転換するという心理的作用が読み取れる。また、Table 3サブカテゴリーの恥かしさを克服する方法の記述内容「一人では恥かしいが複数で行えると恥かしさが小さくなっていく」という心理効果も併用して実際の指導法に役立てていくことは可能であると考ええる。また、Table 2の何かのきっかけがあれば自己の判断で羞恥心を忘れて自己表現できるか、の設問において7割近くが「できる」または「できるときもある」と答えていることから、自由記述で挙げ

られた「恥かしさを克服する方法」や「何かのきっかけ」が学生指導上のキーワードとなりうるのではないだろうか。

ところで、小学校教員においては表現リズム遊び¹²⁾ といったフォークダンスやリズム指導も実施されている。今回の調査に「ダンス表現」は加えなかったが、すでに酒向（12）らによって小学校教員および中学校教員のダンスに対する抵抗感と羞恥心、さらにはジェンダー・イメージに関する報告もあり、ダンスに関して抵抗を感じている人と羞恥心の関係に正の相関が認められている。今回の調査においても「表現実技」を行う上で「注目」や「苦手意識」が抵抗感を産みだし羞恥心を増大させているということも考えられる。

VII. 結語

本研究の目的は、杉浦⁴⁾らの研究結果の再確認をもとに保育・教育実習において学生が自己評価する「表現実技」における「恥かしさ」の実態を探ることであった。さきにも述べたが、保育者・教育者養成校における表現活動や身体活動、その他様々な実技活動における羞恥心の実態とその要因に関する研究はいまだ少ない。また羞恥心の軽減や克服のための指導法も確立されていない現状である。2017年から筆者と声楽の専門講師の2名で担当する1年次の「うたと手遊び」の授業において、コミュニケーションスキルとアクティブラーニング法を実践的に取り入れ、まずはアイスブレイキングから、二人で、そして全員で、楽しく、歌、群読、みんなで息を合わせるなどの構成で授業を行っている。初年次教育、退学防止も視野に入れた授業構成である。初年次前期の授業で出会う教員や学生との関係で生まれる「緊張感」「抵抗感」「羞恥心」への軽減も視野に入れた教育的配慮である。また簡単な作業や行動の繰り返しにより構築される有能性および自信へとつなげ主体的な学びを引き出すよう努力している。2年目にしようやくその効果が出始めており、学生アンケートから前向き思考の記述が顕著に読み取れるようになってきた。こういった一つ一つの授業の積み重ねが実習経験とリンクしていったほしい。

今後は、更に保育者養成校における表現実技と羞恥心に関する大規模調査を行い、心理学的な面からのアプローチ、対象者の過去および現在の経験などを視野に入れ、これらの項目との関連性の検討をすすめていく必要もあると考える。また、小学校教員においてはダンス指導も必修化されており、酒向¹²⁾らによって小学校教員および中学校教員のダンスに対する抵抗感と羞恥心、さらにはジェンダー・イメージに関する報告もある。今回の調査に「ダンス表現」は加えなかったが、今後は保育者・教育者を目指す学生を対象に身体表現活動およびその指導における羞恥心の実態とジェンダーとの関係も調査していく必要がある。また、今回の調査で得られた学生の貴重な前向き記述（恥かしさ克服法および苦手意識の軽減）をもっと抽出できる質問紙調査の工夫とそれら自由記述の信頼性、妥当性の検討も今後の課題であろう。「造形表現」についても同じことが言える。

保育者・教育者養成校において机上の学びと「実習」という現場経験を連動させるためには、グループワーク、調査、ディスカッションなど能動的・主体的に学習をすすめていくアクティブラーニングが効果的であると考え、それらの活動においても羞恥心を拭えない学生はたくさんいる。がしかし、保育者、教育者を目指して入学してきた学生らが授業や実習先において生き生きと表現活動に取り組み、学生一人一人の学びと集団での学びあいから「価値観」の多様性を見出し、総合的な自己発信力を向上¹³⁾させ、保育・幼児・初等教育現

場において自信をもって子どもらに向き合っていて欲しいと切に願う次第である。

アンケート抜粋＜保育・教育系学生用＞

本調査の目的

本調査は、ヒトが羞恥心を抱く理由を検討することを目的としています。本調査は、指導者を目指す学生が「羞恥心」を抱きにくくするための学習方法の開発に役立ちます。

個人情報の取り扱いと回答の拒否

本調査で得られた情報は、個人が特定できない数値として扱われ、研究目的以外では使用せず、使用後は破棄します。本調査に回答するのは貴方の自由意志によるものであり、回答を拒否することも自由です。

回答方法

本調査では、いくつかの質問を挙げています。各質問について、最も当てはまると思うものに○を記入、もしくは適切な回答をして下さい。

調査代表者

有明教育芸術短期大学子ども教育学科
橘 和代

Q1. 年齢 [歳]

Q2. 性別 [男 ・ 女]

Q3. 学年 []

Q4. あなたは人見知りをしますか？

(1. とてもする 2. 少しする 3. あまりしない 4. 全くしない)

あなたの経験や周りの人の経験などを踏まえてご回答ください。

Q5. 前で何かを行う際（歌う、踊る、話すなど）に「恥かしい」と感じる背景にはどのような理由があると思いますか？該当すると思うもの全てに○を付けてください。

1. 過去に失敗した経験があるから
2. 過去に笑われた（馬鹿にされた）経験があるから
3. 経験が少ないから
4. 歌う、踊る、話すことなどに興味・関心がないから
5. 自分が注目されるから
6. 声色や声量、音程などに自信がないから
7. 容姿や自分に自信がないから
8. 失敗が許されないから
9. プライドが高いから

10. 過去に人が失敗したのを見たから
11. 人が自分よりも上手だから
12. 性格上の問題（ネガティブ・根暗・陰湿など）

Q6. 「恥かしい」と感じる背景について、他の理由をお書きください。
(皆様のご意見を参考に「恥かしい」と感じる理由を今後も検討していきます。)

Q7. 何かのきっかけがあれば、自己の判断で羞恥心を忘れて表現活動することができますか？

[例：仕事モードになれば積極的になれる、感情を調整するスイッチのようなものがある …など]

(1. できる 2. できるときもある 3. どちらかというときできない 4. 全くできない)

以下は、あなたの保育・教育実習や授業における経験をもとにお答えください。

Q8. 子どものみの前で行った実習内容（表現実技）で恥かしいと思った順に番号を付けてください。

(a. ピアノ伴奏□ b. 弾き歌い□ c. アカペラで歌う□ d. 絵本読み聞かせ e. 手遊び)

Q9. 子どもと実習先の先生の前で行った実習内容（表現実技）で恥かしいと思った順に番号をつけてください。

(a. ピアノ伴奏□ b. 弾き歌い□ c. アカペラで歌う□ d. 絵本読み聞かせ e. 手遊び)

Q10. 学校の授業で行った表現実技で恥かしいと思った順に番号をつけてください。

(a. ピアノ伴奏□ b. 弾き歌い□ c. アカペラで歌う□ d. 絵本読み聞かせ e. 手遊び)

ご協力ありがとうございました。

【参考・引用文献】

- 1) Lewinsky, H, The nature of shyness. British journal of psychology, Vol,32 (1941), 105-113
- 2) Zimbardo Philip G; Pilkonis Paul; Norwood, Robert, The silent prison shyness. STANFORD UNIV CA DEPT OF PSYHOLOGY, (1977) 1-21
- 3) 成田健一, 寺崎正治, 新浜邦夫, “羞恥感情を引き起こす状況の構造—多変量解析を用いて—”, 人文論研, vol,40, 1 (1990-6-15), pp.73-92
- 4) 杉浦宏季, 橘 和代, 横谷智久, 野口雄慶, “身体表現活動における羞恥心の要因の検討に有効な質問項目の選択”, 福井工業大学研究紀要, vol.45 (2015), pp.264-267
- 5) 杉浦宏季, 出村慎一, 辛 紹熙, 橘 和代, 徐寧, “体格特性に基づく肥満児の判定指標の作成”, 教育医学, Vol,57, No,4 (2012), pp.303-310
- 6) 桶田小百合, 吉崎澄夫, “成人・高齢者看護学実習後の学生が自己評価する陰部洗浄における技術到達度の実態”, 教育医学, vol,62, No.4 (2017), pp.442-448
- 7) 後藤正幸, 酒井哲也, 伊藤 潤, 石田 崇, 平澤茂一, “選択式・記述式アンケートからの知識発見”, 武蔵工業大学紀要, pp43-46
- 8) 出村慎一, 山下秋二, 佐藤 進 “健康スポーツ科学のための調査研究方法”, 杏林書院 (2014), pp.136-137
- 9) 出村慎一, “健康・スポーツ科学のための研究方法 研究計画の立て方とデータ処理方法”, 第1版, (2007) PP73, 林書院
- 10) 有光興記, “罪悪感, 羞恥心と性格特性の関係” 性格心理学研究, VOL, 9, NO.2 (2001), 71-86
- 11) Michael Lewis, Steven M. Alessandria and Margaret W. Sullivan Child Development Vol. 63, No. 3 (June, 1992), pp. 630-638
- 12) 文部科学省学習指導要領「生きる力」, 第2章, 各教科, 第9節, 体育, 第2, 各学年の目標及び内容, (第3学年及び第4学年) (第5学年及び第6学年), 2内容, F表現リズム遊び (2020) 文部科学省
- 13) 酒向治子, 田麻里子, 猪崎弥生, “中学校教員のダンスに対するジェンダー・イメージ, 抵抗感と羞恥心”, 岡山大学大学院教育学研究科研究集録, ol,166 (2017), pp.109-115
- 14) 藤田直也, 西谷 齊, 森山智浩, “学生のためのプレゼンテーション・トレーニング”, プレゼンテーション研究会, 務出版株式会社, (2015)

本研究は、研究計画と聞き取り調査書の立案に関して杉浦氏および真田氏を加え三者で協議を行った。また、IV. 研究の方法 3. 分析方法において、信頼性および妥当性確保のため自由記述の分析⁸⁾、読み取り（解釈）、分類において三者で協議を行った。

謝辞

本稿作成に際し、質問紙調査にご協力いただいた本学学生に心から感謝いたします。